福井の幕末明治 歴史秘話 31

グリフィスが見た明治維新とその中心人物、由利公正

フィラデルフィア市生まれのアメリカ人、W. E. グリフィス。彼は、明治4（1871）年3月、福井藩に、いわゆる「お雇い外国人」として赴任した人物です（当時28歳）。

グリフィスは福井藩の藩校、明新館の理化学教師として招かれました。グリフィスの日記や著作を紐解くと、そこには「Mitsoka」という人物が登場します。三岡八郎、後の由利公正です。

グリフィス肖像
（福井市立郷土歴史博物館蔵）

当時、日本の歴史や政治に関心のあったグリフィスは何度も由利の家を訪ね、教育や政治のことを夜遅くまで話し合ったと日記に記しています。グリフィスは、横井小楠の西洋をポジティブに受け入れる思想を高く評価しており、その弟子、由利とも意気投合したといいます。若きグリフィスにとって、政治の中心で活躍した40代の由利は、新しい日本のビジョンを語り合える人物でした。また、由利にとっても、グリフィスは福井藩の殖産興業に必要な科学技術の教育者としてかけがえのない存在でした。

グリフィスが赴任した3か月後、由利は福井藩の最高権力者となります。そして、その翌月14日に、廃藩置県の命が下されると、政府から東京府知事に任命されます。

藩がなくなるという当時の日本の大変革を福井で体験したグリフィスは、その様子の一端を著作「皇国」にこう著しています。「…少数の乱暴者がまだ三岡（由利）ら天皇支持者を、こんなことになったのはお前達のせいだ、殺してやると言っている。けれども立派な武士や有力者たちは、異口同音に天皇の命令に賛成している。それは福井のためにではなく、国のために必要なことで、国情の変化と時代の要求だと言っている。日本の将来について意気揚々と語る者もいた。その学生は『これからの日本は、あなたの国（アメリカ合衆国）やイギリスのような国の仲間入りができる』と言った。」

由利公正肖像
（福井市立郷土歴史博物館蔵）

由利が東京府知事として上京すると、明新館の優秀な教師はその多くが福井を後にします。グリフィスも福井を離れ、東京大学で教鞭をとった後、31歳でアメリカに帰国します。日本での体験で歴史研究に魅せられたグリフィスは、帰国後、間もなく「皇国」を著し、日米で高い評価を得ました。

激動の明治維新を生きた武士たちと巡り合い、廃藩置県という時代の変わり目を福井で体験したグリフィス。「皇国」で「Mitsoka」は「国家の進歩の中心人物であった。」と描かれています。

関連史料・ゆかりの地

グリフィス記念館

福井初の洋風建築であったグリフィス邸。往時の雰囲気をそのままに再現しています。館内では、グリフィスの功績を中心に、由利公正や日下部太郎など幕末から明治に活躍した先人たちを紹介しています。

【住所】福井市中央3－5－4（JR福井駅より徒歩12分）

参考資料等

「W.E. グリフィスと由利公正（三岡八郎）」グリフィス記念館
三上一夫・舟澤茂樹編『由利公正のすべて』新人物往来社

発行／福井県観光営業部ブランド営業課